

No.35 August 2023 Newsletter ダイバーシティ通信

交流プログラム「高尾山遠足」



2023年5月6日(土)に学生支援スタッフと共に、高尾山に行ってきました。コロナ禍でなかなか学外でこうした活動ができていませんでしたが、当日はOBも交えて、登山をすることができました。今回は、学生支援スタッフ間

生支援スタッフにとって改めてコミュニケーションについて勉強をする機会になったと思います。

このほかにも、運動機能障がいのある方と登山をする際にどのようなことに留意する必要があるのか、視覚障がいのある人と登る時にはどうなのだろう、といった話をしながら登山をすることで、教室から外に出た、生活の中での「障がい」とは何かを意識することができたのではないかと思います。

今後も、街や山をキャンパスにしたこのような取り組みを通し、実際の生活における「障がい」とは何かといったことについて学びを深化させられるような機会を増やしていけたらと思っています。ご関心のある方は是非ご一報ください。一緒にお出かけしましょう。(益子)



での交流もそうですが、「コミュニケーション」をテーマに行いました。登山中は、ろう学生と共に登山で使う手話を勉強しつつ登りました。今年度入学した1年生も含め、声でのコミュニケーションをしない時間を作ってみたり、ヒントを出しつつ、この手話表現はどのようにやるの?といったことについて勉強をしたりしながらの登山は、学

よるダイバー

気軽な雰囲気の中でダイバーシティについて学び合うミニレクチャー「よるダイバー」。2023年度前期は、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。男女共同参画、障がい、セクシュアル・マイノリティ、文化的多様性をテーマとして、基礎知識や時事的な話題についての講義や、それぞれのテーマに関するディスカッションなどを行いました。今回も、職員やプレミアム・カレッジ受講生の参加があったほか、外部の一般の方からも参加があり、これまで以上に多様な背景を持った参加者が集う場となりました。

最終回は「ダイバーシティ・ピブリオバトル」として、希望者がダイバーシティをテーマにした「押しコンテンツ」を紹介するイベントを開催しました。本来は書籍を紹介するピブリオバトルですが、そこは多様性を重んじるダイバーシティ推進のこと、書籍以外にも、オンラインマンガやマーベル映画など、それぞれの考えるダイバーシティを表現したコンテンツが紹介される時間となりました。

参加者からは、「1つの事例でも人によって全然意見が違うことがあったのが面白かった」「さまざまな人の考え方を知れたと共に、自分の理解を深める良い機会になった」などの感想が寄せられました。よるダイバーは、もちろん後期も開催を予定しています。気になったみなさまのご参加をお待ちしています。(藤山)

よるダイバー2023・前期 コンテンツ

- 5月12日 ダイバーシティ推進室の概要と本取組 / 講師: 益子徹
- 5月19日 障がいに関する認識の変遷と理解 / 講師: 益子徹
- 5月26日 「レディースデー」は「男性差別」? / 講師: 藤山新
- 6月2日 障がい福祉の現在地 / 講師: 益子徹
- 6月9日 「文化的多様性」をめぐって / 講師: 藤山新
- 6月23日 「公平」ってなんだろう? / 講師: 益子徹
- 6月30日 セクシュアル・マイノリティの基礎知識 / 講師: 藤山新
- 7月7日 改めて、ダイバーシティとは / 進行: 藤山新

大学説明会【南大沢キャンパス】



2023年7月17日(月・祝)、8月12日(土)に開催された東京都立大学の大学説明会において、ダイバーシティ推進室の事業紹介を行いました。

「障がいのある学生支援」ゾーンでは、聴覚障がい、視覚障がい、肢体不自由などの障がいに応じた支援の内容や、学生支援スタッフの活動などをまとめたポスターなどの展示・解説を、学生支援スタッフを中心として行いました。

また、「セクシュアル・マイノリティの理解」ゾーンでは、基礎知識や本学における取組内容をまとめたポスターを、「理系女子のキャリアパス」ゾーンでは、進路選択のための情報提供の一つとして、本学の理工系学部・研究科の女子学生の就職状況をまとめたポスターを展示・解説したほか、関連資料の展示や配布を行いました。

お昼の時間帯には、フロア中央のスペースで学生支援スタッフによるトークイベントを開催しました。学生支援スタッフに参加したきっかけや実際に活動してみた感想のほか、都立大学を志望した理由や受験勉強の方法、入学後の日々の学生生活の様子など、特に受験を考えている高校生にとって身近な話題を織り交ぜながら、30分のトークを繰り広げました。

例年以上の酷暑の中での開催となりましたが、学生支援スタッフが積極的に来場者とコミュニケーションをとる姿が目立ち、来場した高校生にとっては身近なロールモデルとしての学生と触れ合う、良い機会となったことがうかがえました。(藤山)



編集後記

今年度のDIVERSITY WEEKは、『表現』×ダイバーシティをテーマに、様々なジャンルからお話をうかがうことができました。作品が発するメッセージを誰もが心地よく受け取れることは大切なことです。そしてその表現の向こう側にあるものを知ることで、世界や価値観が広がった貴重な体験でした。(兼子)



東京都立大学 ダイバーシティ推進室

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階

電話: 042-677-1337(直通) / 内線2571

E-Mail: diverwww@tmu.ac.jp

URL: <https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/>

発行日: 2023年8月31日

編集・発行



表現×ダイバーシティ

2023
June.5-9
DIVERSITY WEEK
TMU DIVERSITY
PROMOTION OFFICE

「DIVERSITY WEEK 2023」開催報告

Contents

1 「DIVERSITY WEEK 2023」開催報告
表現×ダイバーシティ

2 文化的多様性講演会
「私たちが正しい場所に、花は咲かない」

セクシュアル・マイノリティ勉強会
「誰もが心地よく利用できる小学校のトイレのデザインを考える」

第1回バリアフリー講習会
「手とアートで伝えるエッセイ」

3 映画上映会&感想シェア/ワークショップ
「手でふれてみる世界」

支援活動報告会
「バリアフリーチェック報告(南大沢キャンパス理系エリア)」

男女共同参画講演会
「マンガは学びに満ちている! ~マンガをジェンダーの視点で読んでみる~」

4 交流プログラム
「高尾山遠足」

よるダイバー
大学説明会
【南大沢キャンパス】

2023年6月5日(月)から9日(金)までの5日間、「ダイバーシティウィーク2023」を開催しました。このイベントは、「男女共同参画の推進」「障がいのある構成員の支援」「多様性を踏まえた構成員支援」という、ダイバーシティ推進室の3つの取組を広く知ってもらうことを目指し、2021年度から始まったものです。

3回目となる今年度は「表現×ダイバーシティ」をテーマとし、写真やマンガ、絵画など「表現すること」という観点から、ダイバーシティに関する講演会や映画の上映会などを、対面とオンラインのハイブリッド形式で実施しました。

会場となったTMUギャラリーでは、ニュースレターやセクシュアル・マイノリティの対応ガイドラインなど、ダイバーシティ推進室の発行物を配布したほか、障がいのある構成員支援の取組や、それに関する学生支援スタッフの活動の様子など、ダイバーシティ推進室の取組を紹介するポスターの展示、所蔵する関連書籍の紹介なども行いました。

今年度のダイバーシティウィークでは、前回に引き続き、バリアフリーチェック報告会において、ダイバーシティ推進室の学生支援スタッフを中心になって発表を行ったほか、セクシュアル・マイノリティ勉強会においても、卒業研究の成果と現在取り組んでいる研究について、本学の大学院生に発表していただきました。このように、学生が情報提供や発表を行う場がこれまでよりも多くなったことは、



表現×ダイバーシティ



今年度のイベントの特徴の一つであるとともに、教員・職員・学生が一体となって活動しているダイバーシティ推進室の特徴を体現していると言えるでしょう。ゆくゆくは、学生からの提案型企画なども実施できることを期待しています。

授業内で学生にイベントをご紹介いただくなど、先生方のご協力もあり、最終的には5日間のイベント全体で、教員、職員、学生、学外者などをあわせ過去最多の、のべ136名の参加を得ることができました。なかには、講演会にゼミ全体で参加したり、教員が大学院生と共に参加したりと、各イベントを授業や教育活動に利用される先生もいらっしゃいました。ダイバーシティウィークに限らず、ダイバーシティ推進室が行うイベントで、こうした参加の仕方がより広まってくると嬉しく思います。

今後のイベントに関して、参加者の皆様からは、「音楽やファッションなど、また他の角度からの『表現×ダイバーシティ』についても聞いてみたい」といった意見のほか、

「障がいのある人に対するスティグマ」「大学院(特に博士後期課程)を修了した女性のキャリアの築き方」「発達障がいのある学生の大学における支援」「ジェンダーに関する話題」は引き続き取り上げて欲しいなど、様々な要望も寄せられました。今後も、ダイバーシティ推進室の活動にご注目ください。(藤山)

私たちが正しい場所に、花は咲かない



イスラエルおよびパレスチナ自治区を訪れ、ひとつの土地をめぐるユダヤ人とパレスチナ人の双方の側からの生活を記録するプロジェクトを進めている、写真家の小山幸佑さんにお越しいただき、作品のスライドショーとトークを行いました。

イスラエルやパレスチナは「紛争地帯」というイメージで伝えられがちですが、もともとは観光目的で現地を訪れたという小山さんは、どちらの立場でもない日本人の自身が見て、実際に触れ合った現地の人々の暮らしを中心に撮影しています。初めてイスラエルを訪れた際に、偶然に声をかけられ、自宅に招いてくれた女性と話す中で、パレスチナにも行くことを話したとたんにその女性の顔色が変わったことに深い印象を受け、お互いの人々の間に何があるのか、写真を通じて考えてみたいと思ったことが、このプロジェクトに取り組みきっかけだったと言います。小山さんの写真は、そこに一人ひとりの人間が生き

ていて、「普通」の生活があることを示してくれています。相互の紛争についても、お互いにそれぞれの言い分があり、どちらが悪でどちらが善などと単純に分けることなどできないことも、写真から見えてきました。

参加者からは、「イスラエルとパレスチナ問題について、ニュースや教科書でみる以外の現地の状況を見たのが初めてで、衝撃を受けました」「そこで生まれ育っていないからこそ見えてくるものがあると感じました」などの感想をいただきました。



現在、小山さんはイスラエルとパレスチナ、それぞれの地域に住む人々にお互いに向けた「手紙」を書いてもらうプロジェクトを進めています。言語が大きく異なるため、おそらくは読まれることのない手紙ですが、お互いのことを想像し、歩み寄るよすがになるかもしれない。どちらの立場でもない小山さんだからこそ、お互いをつなぐことができるかもしれない。そんな思いを抱いたスライド&トークになりました。(藤山)

誰もが心地よく利用できる小学校のトイレのデザインを考える



卒業研究で「トランスジェンダーに配慮した小学校のトイレのあり方」についてまとめたブックを作成し、現在は本学大学院で研究が続いている神字里奈さんにおいでいただき、参加者と意見交換を行うセッションを開催しました。

小学生のうちから自身の性別に違和を感じている当事者は多く、そのため男女別のトイレに抵抗感があり、小学校のトイレに行けない当事者もたくさんいます。神字さんは、当事者が学校生活を快適に過ごすためにも、小学校向けのオールジェンダートイレのサインや、内装のデザインを考えて全国の小学校に提供したいと考え、卒業研究では、文献調査やトイレメーカーなどへの聞き取り調査を行い、その成果をブックにまとめました。

神字さんは、小学校のトイレづくりのヒントとして、①選択肢を増やす②特別感がなく自然な流れで利用できる③癒しのリフレッシュ空間である④愛着が持てるデザインであることの4点を挙げました。

ディスカッションでは、小学校以外の場面でのトイレのあり方についての議論が中心となりましたが、オールジェンダートイレのピクトグラムがあることで、逆に使いづらいつと感じる当事者もいることや、すべてのトランスジェンダーがオールジェンダートイレを望んでいるわけではないことなどについて、フロアとの活発なやり取りが交わされました。昨今話題になっている性犯罪への不安については、女性の安全が確保されることは当然必要なことだが、トランスジェンダーへの配慮は対立するものではなく、同時に検討していくことが必要だとの声がありました。

参加者からは、「今日のお話をうかがい自分の視野が広がったような気がします」「問題は浮上しても解決策はなかなかあがってこず、当事者が我慢するということに終始していたように感じます。今回の発表は、新たな提案をしてくださる方がいるという実感が得られて、元気が出ました」などの感想が寄せられ、ディスカッションを通じて議論が深まり、さまざまな視点が共有された様子を感じられました。(藤山)

手とアートで伝えるエトセトラ

門秀彦さんはろう者の両親をもつCODA(Children Of Deaf Adults)であり、NHKでのアニメーション、キットカットのパッケージ、スターバックスコーヒーの店内アートなどを手掛けるアーティストです。講習会ではご自身の描かれている「Talking Hands」をコンセプトにした絵画のルーツを中心にお話をうかがいました。

門さんは幼少の頃、家庭の内外で異なるコミュニケーション方法を用いて人と対話をし続けてきました。例えば、両親とのコミュニケーションでは、手話を使い、大人のろう者との間では、絵を用いつつ意思疎通を図ってきました。



そうした中で、門さんからは、「コミュニケーションにおいては、互いに通じ合えない部分があって当たり前なのだ」といった前提を持つことが大事」といったお話が

あり、会場では大きく頷かれる方もいました。

実際に、参加者の感想では、「(コミュニケーションに対し)“全部わからなくてもいい”という言葉にも救われました」といった感想や、「(中略)初めて「コーダ」と呼ばれる人がいることを認識しました。障がい者を親にもつ子がいることは想像すればわかるのに、無意識に自分の世界から排除していたことに気づき驚愕した。今回、自分の世界が狭まっていたことに気づけて良かったです。コミュニケーション論も興味深く、これからは自分の言葉も相手の言葉も半分くらいしか理解されない／できていないと思うと、楽に過ごせそうだと思います」といったものも寄せられました。

このように、日々の生活の中での“伝える”“伝わる”といったことの意味について改めて考える機会となった講習会でしたが、今年度のバリアフリー講習会は今後もう1回、実施予定です。ご関心のある方がいらっしゃいましたら、是非次回もご参加ください。(益子)

手でふれてみる世界



視覚障がいのある夫婦が作り上げた、見える人も見えない人も、共に美術作品に手で触れて鑑賞できる「オメロ触覚美術館」。その活動を伝える映画『手でふれてみる世界』の上映会を行いました。このうち、6月8日(木)の回には、本作品を作成した岡野晃子さんにおいでいただき、アフタートークとワークショップを行いました。

2022年に開催された国際博物館会議(ICOM)第26回大会において、「ミュージアム」の定義が改正され、「inclusive(包摂的)」の文言が明記されました。また、2021年に国立民族学博物館で開催された「ユニバーサル・ミュージアム——さわる!“触”の大博覧会」は、単なる障がいのある人への対応、弱者支援という枠を超えた、博物館における「合理的配慮」の実践事例としての側面も持つイベントでした。そうしたミュージアムの可能性のひとつのあり方として、誰もが本物の作品

に手で触れることのできるオメロ触覚美術館の様子を描いた映画からは、「ミュージアムとは何か」という問いかけが伝わってきたように思います。参加者からも、「美術館の展示物は触れてはいけないということを当たり前のように受け入れていたけど、それは視覚障がい者にとっては芸術鑑賞の機会を奪われることなのだ気づき、universalな美術館の取り組みが広まればいいなと感じた」「『見る』ことを心から楽しむ夫妻や子どもたちなどの人々の様子は、こちらも見ている非常に幸せでした」などの感想が寄せられました。

ワークショップでは、参加者が目をつぶって小ぶりの彫刻作品に触れ、「手で鑑賞する」体験を味わいました。ワークショップの参加者からは、「触って想像する自由を感じました」「全ての人のそれぞれの『見る』を尊重する博物館・学芸員はとても理想的だと思いました」などの感想が寄せられ、形だけでなく、大きさ、重さ、質感など、触覚を通じてみる体験は、参加者にも新たな視点をもたらしたようです。(藤山)

バリアフリーチェック報告(南大沢キャンパス理系エリア)

昨年度2022年8月から行っていたバリアフリーチェック講習会(8・9・11・12号館を対象)の内容について、5人の学生支援スタッフを中心に報告を行い、大学内の物理的なバリアについて参加者と共にその課題を共有しました。

報告の中では、バリアフリートイレや各棟のエレベーターに加え、建物の内外にある各通路の点字ブロックや障害物の有無について、発見された課題を共有することができました。

参加者からは、「法律などの基準を満たすことがゴールではないこと、構成員が注目して、声を上げていくことが必要ということを改めて感じました」「こうしてバリアフリー化がされていないところを知ることにより、見かけた障がいのある方がそもそも困っているのかを判断することができ、どのような助けをしたらいいかがわかるようになると思いました」という声が挙げられました。

また、発表した学生支援スタッフからも「修繕や改修すべき場所を見

つけることは私たちにもできますが、それを実行するのは学生だけでは限界があるため、学長や設備に関わる職員の方などとバリアフリーについて一緒に考えることができたのはとても意味のあることだったのではないかと思います。職員さんご意見の中で印象に残ったのが、“災害時の避難において、施設のバリアがないことはもちろんのこと、(障がいのない)学生が障がいのある学生を把握していることも重要”というものでした」という感想が寄せられました。

今回の点検の結果についても引き続き、本学のバリアフリー推進に資するため、学内において提言していきたいと考えています。

みなさんも日々の大学生活の中で、こういったバリアについてお気づきの点がありましたら、ぜひ当室までご連絡ください。どうぞよろしくお願いいたします。(益子)



マンガは学びに満ちている! ~マンガをジェンダーの視点で読んでみると~



東北芸術工科大学准教授でマンガ研究者のトミヤマユキコさんを講師に迎え、私たちにとても非常になじみ深いマンガを題材に、ジェンダーに関する視点から読み、考えることで、ジェンダーやセクシュアリティについて学ぶ講演会を開催しました。

トミヤマさんは、まず「女性の人生は非リアである」として、進学、就職、結婚、出産、介護など、男性に比べ、女性は人生の中でさまざまな分岐点を迎えざるを得ないことを指摘しました。そのうえでトミヤマさんは、「女子マンガは人生の参考書」と語り、「すぐれた女子マンガには、私たちの労働観や、それと密接に関わる人生観や結婚観などが描かれている」ことを示しました。そうした視点から、『ハッピー・マニア』『美少女戦士セーラームーン』『逃げるは恥だが役に立つ』などの名作マンガの数々が、トミヤマさんの軽妙な語り口によって読み解かれ、一連のマン

ガから「恋愛」と「結婚」の関係性の変化や「男らしさ」イメージの変化、夫婦のあり方など、さまざまなことを学べるのが実感されました。「マンガは第一に『娯楽』であるが、読み方によっては、この社会の抱える諸問題について考えるきっかけを与えてくれるし、問題解決のためのヒントを与えてくれることだってある」というトミヤマさんからの締めメッセージは、この講演会を貫く思いとして会場の皆様に届いたようでした。

会場からは、「今まで少女漫画=恋愛漫画という固定概念があったが、今回の講演会で考えが180度変わりました」「昨今はいろいろな形・場所で“戦う女性”が登場するマンガが多く、社会人となった今でも『こういう生き方もあるのか、見習ってみよう』『明日からも頑張ろう』と感じたり、日頃のモヤモヤを言語化してもらったことでスッキリしたりと、励まされることが多いです」など、マンガを深く読み、楽しむ視点が伝わったことがうかがえる声が寄せられました。(藤山)